

ムカシトンボが飛ぶ里を、未来につなぐため = 中土佐町大野見 =

清流通信読者の皆様こんにちは。今回は、中土佐町大野見から、“エコファーマー”西村善徳さんについてお伝えします。



↑ 西村善徳さんのブログ“奥四万十物語”トップページ



中土佐町大野見地区

四万十川の上流域、中土佐町大野見地区。中央を、地区を二分するように四万十川が流れ、迫ってくる山々の間に、人家や田畑が点在する。四方を囲む山の峰々は、全てがその分水嶺で、降った雨はそれぞれの流れに集まって、やがて四万十川、そして太平洋へとつながっていく。2006年1月に中土佐町と合併した旧大野見村は、面積約100km²、人口1430人ほどの山あいの小さな集落だ。四面が500m以上の山に囲まれたここは、総面積の92%が山林で覆われてはいるが、寒暖の差が大きく、また高知県下でも多雨地域であることで、良質の米が採れることでも知られている。

1月中旬、ここ大野見地区で、代々受け継がれてきた田畑を守りながら、生姜と米を有機栽培する、西村善徳さんを訪ねた。

四万十川の上流域で、農業をすること

四万十川の昔を知る人々が異口同音に言うあの言葉、『昔の四万十川は、“清流”そのものだった』という“過去形”。子ども時代を過ごした70年ほど前の四万十川は、見事なまでの“清流”だったと、西村さんもそう話してくれた。

しかし西村さんは、こうも続ける。「四万十川の清流を守るためには、『まず上流をキレイにしなくてはいけない』という合言葉が地域にはありました。しかし、合言葉だけでは何も変わらない、原因を探って行動をしないとイケない。」
「四万十川の清流が今日まで支えられてきたのは、流域の町が村が、過疎だったからだと思います。開発から取り残された過疎の町や村が、今の四万十の自然を守ってきたのは紛れもない事実でしょう。しかし、過疎地域といっても経済活動と無縁ではられない。流域には大きな工場はありません。生活排水といっても、人口が減っているここでは、それが水質悪化の要因とは考えにくい。では、何なのか。四万十川が汚くなった理由は色々あると思うのですが、私は一つに、自分達がやってきた“農業”が原因ではないかと考えているのです。」

今年のように寒い冬には、暖かい“生姜湯”がうれしい。ふうふう言いながら啜る生姜湯は、身も心も温めてくれる飲み物だ。実はこの生姜、露地物の生産量日本一は高知県で、国内生産の半分以上をも占めるという。この生姜栽培が、高知県で盛んに行われはじめたのは、稲作の減反に伴う転作作物としての導入がすすんだ、1970年代のようだ。

「四万十川を汚した農業は、“水田”ではなく“畑作”で、それに転作せざるを得なくなってきたことが背景にあるのではないかと自分は考えています。畑作には多くの（化学）肥料を使う。そこから私は、流域で農業をする者として、“農業が四万十川を汚すようではいけない”と思うようになりました。有機生姜を作るのは、小規模だが、川を汚さない、環境に負荷をかけない農業の実践なのです。」こうして“有機無農薬栽培”を目指しての、西村さんの挑戦が始まった。

「現在の作付けは、米が5反ほど、生姜は6反ほどで、全て有機栽培です。手間はかかりますよ。けれども、川を汚さない農業をやるためです。何が有機農業か？自分は今でもその答えを求めつづけています。今のところは土を大切にすることが有機農業だと思っているのですが。」「特に生姜については、現在地域の“耕作放棄地”を借りて、そこを耕し生姜を作り、農地（耕作地）に戻してお返しすることをしてしています。“物好き”といわれるが、一旦土地が荒れるとイノシシなどが出るようになり、余計人々がこの地を離れていく。そして、悪循環が始まります。土地を離れた人は二度とここには戻ってこない。ただでさえ高齢化が進み、どんどん地域に人が少なくなっていくのに、ですよ。」

四万十川の清流を守るためにも、地域を守るためにも、安心安全な作物を消費者に届けるためにも、西村さんには、貫かねばならない姿勢があるのだ。

四万十川流域の山のこと・・・

「もう一つの原因は“林業”です。」日本の高度成長期、昭和30～40年代、日本中が“全山植林”のスローガンの元に、木を植えた時代があった。その時西村さんも、何のためらいもなく、明るい未来図を描いて植林をし続けた。

「全山植林の時代には他のことに見向きもせず、ひたすら植林をしました。しかし、その目論見は皆はずれ、全て夢と消え去りました。木材の価値が下がった今日、山へ投資したものは返ってこないばかりか、外材が入ってくる市場では、国産木材の価格が暴落していて、山師への労賃や材木の運搬費などを払うと赤字になってしまう。だから、山に入る気力を失ったとでも言いましょうか、山を放置してしまった。その結果、山が荒れた。人工林は自然林と違い、手入れをしないと自然を破壊していくのです。そういった意味で、植林が進みすぎたことも、川が汚れた理由でしょう。だから、山のことを考えると心が痛む。四万十に暮らしてきた自分達の責任の重さを、今でこそ身にしみて感じています。」

四万十川は“地球人共有の財産の一つ”という考え方

ところで、この四万十川上流～源流部に位置する大野見地区には、“生きた化石”と言われるムカシトンボ（昔蜻蛉・学名 *Epiophlebia superstes*）が生息する。このトンボは日本の固有種で、北海道から九州・四国まで分布しているが、水温が低い、山間の森林に囲まれた溪流にのみ生息するという。しかし近年、水のきれいな溪流が森林の伐採や開発などにより各地で消失しているため、ムカシトンボの生息域は各都道府県に数箇所ほどの割合となっているようだ。

そのムカシトンボ、幼虫の期間が5年とも7年とも言われている。今年孵化するその幼虫たちは、7年後に成虫となった時、どういう空を飛んでいるのだろう。

「私は時々、“今の暮らしのままで良いのか？”と自問自答し、現状を見直すようにしています。近年は、生活そのものがどんどん変わり、人は便利さを優先し始めた。人間は、その欲望に限界を持ち合わず理性がないとダメです。でなければ、人は欲望のため、この地球に生存できる可能性を少しずつ失うことになる。」「四万十川は、高知県だけの川ではなく、四国の川でもなく、この川は、地球に残された数少ない地球人共有の財産の一つだと、私は考えています。たまたまこの地に暮らすことになった私たちが、未来につながらねばならないこの川を、自分達の代で汚してはならない。」

この川を未来につなぐ責任は、他でもなく今に生きる私たちにあるのだ。そのことを、私はあらためて考えてみた。

昨年西村さんは、高知県のエコファーマー（「持続性の高い農業生産方式の導入に関する計画」を提出して認定を受けた農業者）の認定を受けたとき、「これからは“エコファーマーとして活躍する若い後継者”を育成してゆく責任を感じています」と語っていた。しかし、その“若い後継者”は、既に育ちつつあるようだ。

「息子と21歳の孫が、私の後を継いでくれています。けれども、孫はまだまだ若いので、一度、外の世界を見てきた方が良いでしょう。そして、世の中で、もまれた後にここに戻って来て欲しいのですがね。」

そういう西村さんの思いとは裏腹に、頼もしい若い後継者は、先輩の背中を見つめながら、既に、未来へと続く激動の中を、逞しく巣立っていかうとしているようだ。

その先には、ムカシトンボが自由に飛び交う青い空が、きっとあることを信じて。

（取材/記事：矢野由美子）

